

と考え報告する次第であるが、唯紫斑及び腸出血を除けば一般状態が比較的良好であつたので特記すべき治療は行わなかつた。

文 献

- ① Yuval, A.: Reaction to procaine penicillin, letter to the editor. Lancet 1: 163 (Jan. 19) 1952.
 ② Kolodny, M. H., and Denhoff, E.: Reaction in Penicillin therapy. J. A. M. A. 130; 1058, 1945.
 ③ Long P. H.: Symposium on medical therapeutics clinical use of antibiotics, M. clin. North America. 34; 307, 1950. ④ 吉葉朗, 栗栖明: ペニシリン・アナフィラキシー症状を呈した一臨床例, 治療 35; 8, 昭28. ⑤ 武田義雄: 紫斑病型・血滲病型を呈せるペニシリン・アレルギーの一例, 治療 36; 12, 昭29.
 ⑥ 伊藤: 皮膚科のアレルギー. ⑦ 鈴木: 日本医師

- 会雑誌, 31; 581, 昭29. ⑧ 連水伸三他: ペニシリン・アレルギーについて, 日本臨床 11; 6, 昭28.
 ⑨ 島夷沙: ペニシリン過敏症と思われる一例, 日本医師会雑誌, 28; 320, 昭27.

A Case of Penicillin Reaction

Yukio Sunohara

Kiso-Fukushima Railroad Dispensary

A case of penicillin reaction was reported which showed purpura after the administration of penicillin. The patient had a severe skin disease in his past history.

胃ノイリノームの2例

昭和30年10月4日受付

信州大学医学部丸田外科教室

中村 康 雄

諏訪市寺島病院

大野 幸 彦

唐木 靖 雄

緒 言

胃に発生する腫瘍としては癌腫が大多数であつて良性腫瘍は稀な疾患とされているが、就中胃ノイリノームは極めて稀であり、その報告例も稀い。我々は最近胃ノイリノームの2例を経験したので茲に報告する。

症 例

第一例。望月某。48才。男性。

家族歴では弟が胃潰瘍で手術をうけた他、特記すべき事はない。

20才の頃から食後に胸ヤケがあり、3年前にレントゲン透視をうけた所、幽門の近くに潰瘍の痕跡があると云われた事がある。約2ヶ月前から食慾不振を訴え、約1ヶ月前の早朝、心窩部鈍痛、胸ヤケ、倦怠感あり、同日夕刻黒色下痢便あり、同時に顔面蒼白となつて倒れた。某医に出血性胃潰瘍と云われて約1ヶ月間内科的治療をうけ、全身状態が良好となつたので根治手術を希望して当科に入院した。

現症: 体格栄養中等度。貧血を認めず。糞便潜血反応陽性。胃液酸度は正酸度。腹部平坦。圧痛なく腫瘍は触知しない。胃部レントゲン透視所見でレリーフは正常、幽門庭の小彎側に可動性半球形胡桃大の陰影欠損を認めたので、胃癌と診断した。

手術所見: 胃小彎側の幽門部の稍々後壁寄りに胡桃

大の腫瘍あり、周囲と線維性に癒着しているが、所属淋巴腺の腫脹を認めない。よつて癒着剝離後胃切除術(Billroth 第2法)を施行した。術後の経過は順調で20日後治癒退院した。

剔出標本肉眼的所見: 本腫瘍は幽門輪から約2匁離れた小彎側の稍々後方にあつて、粘膜下組織に位置し、而かも極めて限局性で境界明瞭、周囲組織への浸潤等は全く認めず、恰も球形の結節をはめこんだ様である。(写真1) 大きさは直径約4匁、表面平滑で、中央に帽針頭大の潰瘍を形成して陥凹している。硬度は弾力性軟、剖面は灰白色実質性で、粘膜は腫瘍により上方に挙上せられ、筋層は下方に圧排され萎縮していた。(写真2)

剔出標本組織学的所見: 腫瘍組織は比較的細胞成分に富み、長楕円形鈍端紡錘形核を持つ線維形成性腫瘍細胞からなり、之等腫瘍細胞の配列は不規則であつて、流水乃至渦巻状配列、或は又核の Parastellung 等に乏しい。然し腫瘍細胞は概して、大きさ、染り具合、形等均一であつて、特に悪性像を思わせる様な所はない。(写真3) 又 van Gieson 染色で赤染する線維成分は少い。尚腫瘍の頂点に接する胃壁は壊死に陥り、胃粘膜には帽針頭大の潰瘍を形成して居る。即ち潰瘍底は極く薄い壊死層を介して腫瘍組織と直接して

写真 1

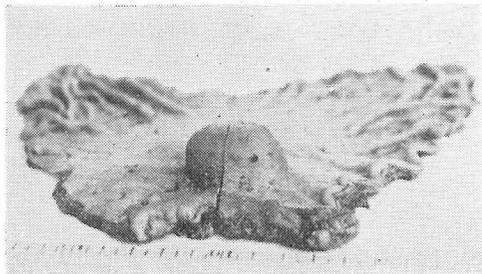


写真 2



写真 3

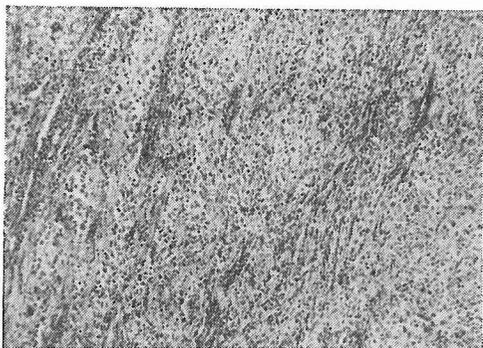


写真 4

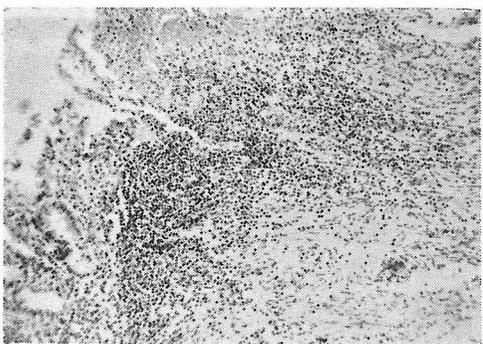


写真 5



写真 6

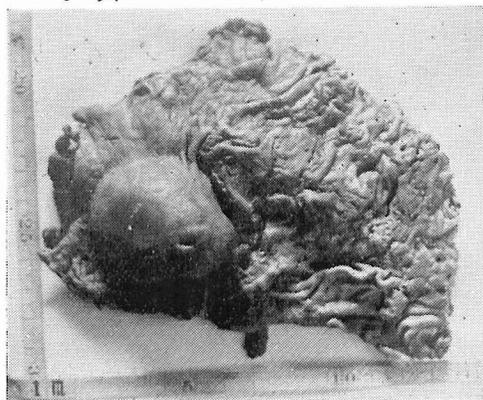


写真 7

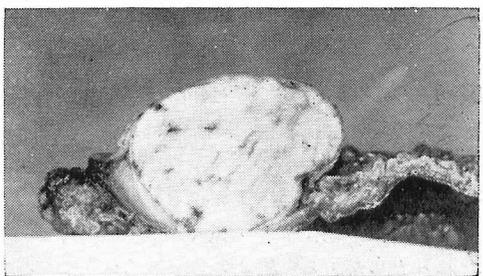
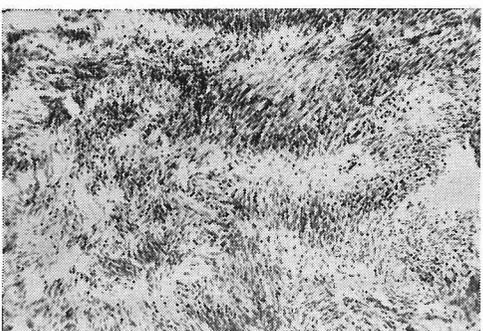


写真 8



いる。(写真4)

第二例。桑沢某。50才。男性。

家族歴：既往歴に特記すべき事はない。25才頃より時々食後に心窩部鈍痛を訴え、又同じ頃より便秘の傾向があり時に黒色便を見た事があるが、特に治療をうけることなく現在迄経過して居た。昭和29年8月中旬頃より食后4、5時間すると、屢々心窩部に激痛を訴えるようになった。然し食慾は良好で胸ヤケ、悪心、嘔吐等は全くなく、某医により内科的にパンサインの投与をうけていたが、8月下旬に胃癌と云われて来院した。

現症：体格栄養中等度、赤血球405万、血色素93%，糞便潜血反応陽性。腹部は平坦で腫瘍を触れず、上腹部にわずかに抵抗を感じる程度にて、その部に一致して軽度の圧痛があつた。胃部レントゲン透視所見では、レリーフは正常、幽門部附近の大彎側に可動性半球形の陰影欠損像を認めたので胃癌と診断した。(写真5)

手術所見：幽門部近くの大彎側に鶏卵大の腫瘍を認め、周囲との癒着少く、所属リンパ腺の腫脹を認めない。よつて型の如く胃切除術(Billroth第1法)を施行した。術後は経過良好で23日目に治療退院した。

別出標本肉眼的所見：腫瘍は幽門輪より約8厘口側の大彎側に位置し、境界鮮明、孤立性、大きさは鶏卵大、表面平滑で中央に輻針頭大の陥凹2ヶあり、硬度は弾力性あるゴム腫様硬度、割面は灰白色実質性で、粘膜漿膜共に浸潤性変化を認めない。(写真6及び7)

別出標本組織学的所見：極めて限局性で周囲組織への浸潤等は全くない。腫瘍組織は典型的のノイリノームの像であつて、腫瘍細胞は流水状乃至渦巻状配列をなし、核は紡錘形で屢々所謂Paradestellungを示している。van Gieson染色では赤染成分を殆ど認めない。(写真8)尚胃粘膜の壊死の結果本腫瘍組織の一部は胃腔内に殆ど裸出状態であつた。

考 按

ノイリノームは1919年 Verocayによつて神経のシュワン氏鞘細胞より発生する腫瘍として初めて報告されたものであつて、特に脳及び脊髄等の中枢神経に発生することが多いのであるが、末梢神経に発生せるノイリノームも比較的屢々報告されている。然し乍ら胃に発生したノイリノームの報告は甚だ稀いものである。今その頻度を調査すると諸家の報告により多少の相違はあるが、手術せる胃腫瘍の中良性腫瘍は0.5%乃至4.4%、平均1.84%であり、^{①②③}更に胃に発生する良性腫瘍の内訳はStefano^④の報告によると、その%は筋腫及びポリープであつて、ノイリノームは胃良性腫瘍1000例中僅かに45例4.5%にすぎないと云う。我々の経験では胃腫瘍として手術を行つた症例156例中胃ノイリノームは2例1.2%であつた。本邦に於ては昭

(表) 胃良性腫瘍の頻度

報 告 者	手術せる 胃腫瘍数	良性腫瘍	%
Lock Wood	273	12	4.4
St. Lukes Hosp.	170	4	2.3
Hunermann	242	4	2.0
Orator	145	3	2.0
田 宮・野 崎	211	4	1.9
Troell	424	6	1.5
Gutierrez	2168	27	1.3
Eustermann & Senty	2168	27	1.3
Domanig	200	1	0.5
著 者 等	156	2	1.2
計	6157	90	1.84

和13年細川^⑤が本症の1例を報告したのが最初であり、以来昭和15年に奥田^⑥昭和25年に原田^⑦昭和29年に氏家・永沼^⑧及び宇野・佐藤^⑨昭和30年に谷口・今関^⑩垣内・影沢^⑪及び高越・近藤^⑫等の報告がある。その他我々の調査に漏れた報告例が多少はあるとしても本症が稀な疾患であることは疑のない事実である。

臨床症状は他の胃良性腫瘍と同様で自覚的に何等の症状を現わさないもの、或は食慾不振、悪心、心窩部鈍痛、胃部膨満感、嘔吐等を訴えるものがある。また時として腫瘍頂点に潰瘍を形成^{⑬⑭}して潜血反応が陽性となり、或は吐血、下血等の症状が現われ、稀に大量の出血により虚脱に陥ることもある。^⑮ Ronzini^⑯は本症を臨床的観点から1)腫瘍を触れるが自覚症状の無いもの。2)腫瘍を触れ胃痛のあるもの。3)腫瘍を触れず自覚症状のあるものゝ3種に分けているが、これを要するに本症には特有の症状は無く、全く無症状に経過して偶然発見されるものから胃炎、胃潰瘍、胃癌等を疑わせる症状を呈するものまで種々のものがあると云える。我々の第1例は約20年前より胸ヤケがあり、最近に至り食慾不振、下血を訴え、第2例は約25年前より心窩部の鈍痛があり、次第に激痛となつて現われ、レントゲン線検査の結果いずれも胃癌と診断されたものである。然し乍ら本例では下血、腹痛等の自覚症状が長期間に亘つて存在し、レントゲン透視所見が進行せる胃癌を思わせる像を示したにも拘らず全身状態が良好で悪液質の徴候を示さなかつた点が胃癌と異なる点であつた。殊に2例に於て共にみられた下血はノイリノームの増大によつて発生した腫瘍頂点の潰瘍からのものであると考えられるから、胃ノイリノームの臨床診断に対して本例は興味ある示唆を与えている。

胃ノイリノームは胃壁の Meisner 乃至 Auerbach 氏神経叢のシュワン氏鞘より発生すると云われており、組織学的には本症の特徴は腫瘍細胞の配列が流水状乃至渦巻状であつて、最も著明なのは核の所謂 *Paradestellung* をなす点である。我々の第1例は腫瘍細胞の配列は不規則で核の所謂 *Paradestellung* にも乏しく典型的とは云えなかつたが、第2例は腫瘍細胞の流水状乃至渦巻状配列が見られ、核の所謂 *Paradestellung* も明瞭であり極めて典型的なノイリノームの像を呈していた。而かも第1例及び第2例共に van Gieson 染色で赤染する線維成分を殆んど認め得なかつた。尙我々の経験した例に見られた腫瘍頂点の潰瘍の成因は、粘膜下組織に於て限局性、且つ圧排性に増大した腫瘍の圧迫によつて粘膜が壊死に陥り、潰瘍を形成したものと考えられる。

結 論

48才及び50才の男性に発生した胃ノイリノームの2例に就いて報告し、併せて本症の発生頻度、臨床症状、及び病理組織学的事項について若干の考察を試みた。

組織学的所見に就いて御教示下された病理学教室矢川助教に謝意を表す。

参 考 文 献

- ①三宅, 小坂: 東京医事新誌, 69, 2509, 昭13.
 ②田宮, 野崎: グレンツ., 9, 557, 昭10. ③岡本:

- グレンツ., 13, 571, 昭14. ④Stefano: 三宅, 小坂: 東京医事新誌, 69, 2509, 昭13より引用. ⑤細川: 癌, 32, 167, 昭13. ⑥奥田: グレンツ., 14, 110, 昭15. ⑦原田: 日本臨床外科医会雑誌, 11, 61, 昭25. ⑧氏家, 永沼: 日本消化機病学会雑誌, 51, 197, 昭29. ⑨宇野, 佐藤: 臨床外科, 9, 460, 昭29. ⑩谷口, 今関: 日外会誌, 56, 119, 昭30. ⑪垣内, 影沢: 臨床消化器病学, 3, 93, 昭30. ⑫高越, 近藤: 外科, 17, 196, 昭30. ⑬W. Gyri: Wien. Med. Wschr., 47: 936, 1952. ⑭Ronzini: 奥田: グレンツ., 14, 110, 昭15より引用.

Two Cases of Neurinoma of the Stomach

Yasuo Nakamura

Department of Surgery, Faculty of Medicine,
Shinshu University

(Director: Prof. K. Maruta)

Yukihiko Ōno, Yasuo Karaki

Terashima Hospital, Suwa-shi, Nagano-ken

Two Cases of neurinoma of the stomach were reported. The patients were 48 and 50-year-old male respectively. The incidence, clinical signs and pathological findings of neurinoma of the stomach were discussed.

ミオクローヌス癲癇の1例

— 本邦統計ならびに筋電図学的考察 —

昭和30年10月10日 受付

信州大学医学部第二内科教室 (主任 大島良雄教授)

佐 竹 清 人 安 藤 鋼 之 助
 小 林 和 雄 村 山 繁 光

緒 言

ミオクローヌス癲癇は甚だ稀な疾患で, Unverricht^① Lundborg^② が一疾患単位として系統的な報告を行つて以来, 海外では数十例が報告せられているが, わが国では大正13年中沢^③が最初の報告をしてより, 未だ30余例に過ぎない。

著者等は Unverrichtがかゝげた諸特徴とやゝ異つた臨床像を示し, 高令になつてあらわれ, 家族的, 遺伝的關係を証明し得ず, 又ミオクローヌスが癲癇発作に先行し, しかも運動効果を伴う1例に遭遇したので, 本邦報告例と比較検討し, 更に筋電図学的考察を加えて報告する。

臨床経過概要

症 例: 60才, 女性, 家婦

家 族 歴: 父系の祖父母は共に老衰で, 又母系の祖父も同じく老衰, 祖母は50才で卒中で死亡, 父は80才で直腸癌, 母は76才で卒中死を遂げている。同胞は3人, 兄は67才で糖尿病に罹患中, 弟は54才で健康, 夫は61才で健康, 子供は6人をもうけたが, 中3人は戦死及び乳幼児期に死亡している。

調査し得た範囲内には, 同様の疾患の存在は認められず, 又大酒家の存在もない。

既往歴: 正常出産であつたが, 5~6才頃土蔵の2階から落ちた事があるという。その詳細は明らかにし